

実作を含む連句を対象にした授業

吉 丸 雄 哉

三重大学共通教育センター
大学教育研究—三重大学授業研究交流誌—
第 22 号 別 冊
2 0 1 4 年 発 行

実作を含む連句を対象にした授業

吉丸 雄哉

はじめに

三重大学人文学部に 2010 年 4 月に着任してから、共通教育の共通セミナーBで実作を含む連句を対象とした授業を実施してきた。連句は複数の人間が長句（五・七・五）と短句（七・七）を交互につないで、一定数続ける詩文芸である。授業の形態や教材など、試行錯誤しながら、実作を含む連句を対象とした授業を安定して実施できるだけの方法にたどり着いたので、それを説明するのが本稿の目的である。

実作を中心とした俳諧（俳句）の授業は珍しくない。中高でも大学でも行われている。復本一郎『俳句実践講義』（岩波現代文庫、平成 24。初出は岩波書店、平成 15）は、勤務校での実作指導の方法を紹介するとともに、また俳文芸の歴史や魅力を伝える教科書となっている。寺島徹・樋口敦士「付け句を用いた韻文指導の実践と課題：中等教育における授業例を通して」（桜花学園大学人文学部研究紀要 14、平成 24・2）は高等学校での付け句指導を詳細に記している。大学における連句の授業は、深沢眞二『連句の教室 ―ことばを付けて遊ぶ』（平凡社新書、平成 25）が、和光大学での二十年におよぶ連句の授業から、そのノウハウを公開しており、たいへん参考になる。

そういった立派な授業報告があるなかで、あえて連句の授業の報告をするのはおそれ多いことだが、筆者が他の報告者と違うのは、筆者が俳諧の研究者でないことである。筆者は江戸後期の戯作を中心に研究している。狂歌の論文はあるが、俳諧を専門とせず、散文を日頃対象としている研究者である。つまり、復本・寺島・樋口・深沢といった俳諧を専門にする研究者とくらべて、指導力が大きく劣るのである。では、そのような俳諧の達人でないと、連句は教えられないのか、私のような俳諧の専門家でない人間でも、連句を教える方法はないのか、という視点で本稿は書かれている。おそらく、俳諧の専門家からすれば、未熟だと思える点も多々あると思うが、私と同様に未熟ながらも連句を授業に導入したいと思っている人たちのなにかの参考になるかと筆をとった次第である。

俳句（発句）ではなく連句の実作を行うことの意味

俳句（発句）を作るのではなく、連句を作る授業を実施しているのは、理由がある。連句は、前句があって、それに付けるので、自由に作らねばならない俳句に比べて作るのが簡単だからである。また、俳句は五・七・五しかないが、連句であれば五・七・五の長句だけでなく、七・七の短句があるので、よりやさしく作れる部分がある。連句の独立性のなさは、連句を読むと発句が下手になるとして、明治以降連句が軽視されてきた一因となっているが、発句よりも俳諧の初心者に向いているのは確かである。

また、発句であれば、当季（今の季節）で、実景に則して詠むのが普通である。そうすると連続した授業では詠める句が限られてしまう。連句であれば、季節は自由に移り変わり、また無季の句も入れることができる。恋句なども想像力豊かに詠めるので、より自在に楽しむことができる。

連句の評釈と俳論の要約

筆者は九十分の授業を行っている。すべてを実作に用いているわけではない。授業は三部構成にしており、実作、俳論の要約、連句の評釈を行っている。実作より先に、俳論の要約と連句の評釈の解説をする。もともと筆者は近世文学を専攻していたので、大学院の修士課程と博士課程で蕉風俳諧を学ぶ機会があった。そのため、授業での評釈も当初は『猿蓑』『市中は』歌仙や『炭俵』『むめがゝに』歌仙を選んで教材とした。これらの連句が優れているからである。ところが、蕉風俳諧は研究が進んでいるために、注釈書が十分に備わっている。そのため、学生はどうしても、注釈書を調べてきて、その解釈をなぞることになってしまう。そこで三年目は、涼袋（建部綾足）がかかわった蕉門伊勢派の『いせのはなし』の評釈を行った。伊勢派は平明でわかりやすく、かつ注釈のあるものは少ないからである。ところが、共通教育で集まる学生は、文系だけではなく、理系の学生も多く、古典文法の理解が十分でないために、簡単な句でも理解できないことが少なくなかった。評釈の

手がかりは、涼袋が残した俳論にあり、『建部綾足全集』（国書刊行会）に入っているのだが、それを読みこなすのは難しかった。

そこで、四年目は近代俳句に切り替えることにした。漱石は学生も知っていて、面白い句はあるが、連句はあまり上手ではない。正岡子規の連句は上手だが、連句批判があって、アンビバレンツな面が解釈を難しくする。そこで寺田寅彦の連句を扱うことにした。蓬里雨（小宮豊隆）・寅日子（寺田寅彦）・東洋城（松根東洋城）という漱石門下三人による「短夜の旅寝なりしが別れかな」歌仙（昭和六年十月、「渋柿」初出）を扱った。寺田寅彦の連句はわかりやすく、江戸時代のものより式目に忠実である。もともと理系の人物であることも、理系の学生が多い共通セミナーで学生に親しみを感じさせる利点があった。

評釈が簡単になったこともあって、俳論の要約も行うことにした。要約字数は学生に任せた。『新版寺田寅彦全集文学篇』（岩波書店）は附属図書館に備わっているが、その俳論のほとんどが青空文庫に収録されており、テキストをプリントして配布しなくてもよいのも利点があった。

連句の教科書

連句の教科書として、東明雅・丹下博之・佛淵健吾『連句・俳句季語辞典 十七季 第二版』（三省堂、平成19）を利用している。二年前より受講にあたって学生の購入を義務づけている。『十七季』は文庫本と同じ大きさ（ただし横本）で一冊（六三四頁）とコンパクトな連句用の俳諧歳時記である。正月と四季の季語を収めるほか、百頁分が連句の解説となっている。式目の説明は必須なので、これが収録されていることは大きい。税別二千五百円なので安くはないが、一生ものの辞典であることを理解して購入してもらっている。

季語は解説だけで、例句が収録されていないのだが、これはかえってよい。例句があると、その字句を一部変えることで、作句する学生が出てくるからである。名句を知ることが重要だが、実作にあたって初心者に過度な影響がないように注意しないとイケない。

連句の実作

連句の実作は、発句から始まる。最初二年は私が自作の発句を用意したが、ここ二年は学生にも作ってもらった。連句の作法の通り、当季で实景に即して詠んでもらう。連句は膝送り（順に詠む）と出勝（でがち、早いもの順）の式目がある。現在行なわれている連句会では、膝送りで参加者を一巡させて、それから出勝に移行する人が多いようである。長句でも短句でも一句詠むのに十五分から二十分程度はかかる。慣れた人たちでやるとして、一時間四句のペースなので、連句の基本である歌仙（三十六句）を巻くには九時間はかかる。簡略版の半歌仙（十八句）で四時間半である。授業時間の半分を当てれば、二句は進むことになるが、膝送りの場合、句を案じている人以外は手持ち無沙汰になる。これが連句の会であれば世間話でもして過ごせばいいのだが、授業ではそうはいかない。俳諧にまつわる話をして時間をつかっても限界がある。

出勝にすると即吟が得意な人の句が選ばれやすくなる。また、初心者が多い場合は、早くできる句がよい句とは限らないのも問題である。

当初の二年は、学生が作る句を私が手を入れて直していた。句の添削はありふれたもので、句の上達の王道である。江戸時代の連句でも、捌き手である宗匠が指導していくのは普通である。だが、私自身が江戸時代の俳諧を学んできたので、俳諧のセンスが古いのが問題であった。「こうすれば『かるみ』が出た句になります」と蕉風の感覚で手直しをしても現代的な学生の感覚と合わないのである。私の俳風を慕ってきたものならともかく、下手に手直しされても学生も面白くなさそうであった。

そこで、過去二年は次の方法をとった。全員が句を作り、短冊（出席票の裏をつかった）に一句書いてもらって、一度私の手元に集める。私は、それをその場でノートパソコンに入力して、その場で人数分プリントアウトする。句の作者の名前は載せない（私も見ない）。時間を七、八分とって、その中で、自分が作った以外で一番いいと思う句を一つ選んでもらう。そして、ある学生にどの句を選んだか、そしてどうしてその句がよいと思ったのか説明してもらおう。その後、句を作った人が名乗りでて、どのような考えや気持ちで作ったのかを述べてもらう。学生が順番に説

明し、最後は私で、自分の選句のほか全体の講評を述べるという形式である。基本的に、最多数の句を選ぶのだが、式目や俳諧の決まりごとに著しく反している場合や、同数で意見が割れた場合などは、私の判断で付句を選ぶことにしている。

句会に出ている人は、なんだと思ったかもしれない。付句を選ぶのに、句会での選句に一般的に行われている方法を転用したのである。これのメリットは、匿名なので公平性が高いこと、作句も選句も学生すべてが参加しないといけなないので、時間が無駄にならないことにある。また、句作は基本的に予習であり、時間はいくらでもかけられるため、学生も三十分や一時間をかけて、質の高い句を作っていた。時間があれば、選句のさいにすべての句の評を述べさせてもいいのかもしれないが、それは授業では難しいかもしれない。デメリットは選句に時間がかかるので、授業内で作句し、お互いに講評を加えて選句するという形式がとりにくいことである。九十分すべてをつかえばいいのかもしれないが、それでは間延びした感じになるのではないかと考えている。

ルールの適用

俳句や連句にはルールが多い。それをどこまで適応するかが問題になる。教員の役割は捌き手(進行役)であって、最低限の式目や俳句の常識は知っておく必要がある。細かい違いは『十七季』に則して解釈するのがよいだろう。

二句目の韻字留や三句目の留め方(に・にて・らん・もなし)など、細かいルールは気にしないで教える方法もあると思うが、式目は説明して、できるだけ守ってもらったほうが、初心者にはむしろ簡単のように思われる。表現が限定されたほうが楽に作れるのである。

季語はその変化は、捌き手から、「次も秋を続けてください」「冬か春に転じてください」「無季の句でもいいです」などと指示したほうがよいと思われる。

季語は太陰暦に沿って使用するやり方をとっている。初・仲・晩などの区別も意識するように指示している。よって、筆者の授業では、七夕は初秋の行事の季語であり、苺は初夏の植物の季語となる。これは『十七季』と同じである。連句の細かいことは、おそらく授業が終わって何年

かすれば全く忘れてしまうかもしれないが、日本はかつて太陰暦を使っていて、それに基づいて季語が決められていることは覚えていて欲しいからである。

指導の注意

連句は「付け」と「転じ」が重要である。前句に付けるのはまだ難しくない。難しいのは「転じ」である。反復停滞を避けるためのルールである「去嫌」は守らせたほうが、変化に富んだ句を作りやすい。打越(前々句と同想)にならないようにくりかえし注意しなければならない。さける方法の一つに「自他場」があるが、これは無理に守らせるとつまらなくなる規則だと思うので、学生には薦めていない。

授業が全部で十五回であり、最初の一回が導入だと考えると、宿題にした場合、十四句しか進まない。時間が余った時に、出勝で付句を作ることがあったとしても、半歌仙(十八句)も進まない。

歌仙(三十六句)であれば、およそ五・十四・二十九句目が月の定座(月の句を詠む)、十九句目と三十五句目が花の定座にあたる。これを守っては授業で、花の定座までいかないので、二回目以降の月の定座や、花の定座は適宜引き上げて詠むようにしたほうがいだろう。

また「恋の呼び出し」「恋句」「恋離れ」の句は入れたほうが盛り上がる。教員のほうから、「これは恋の呼び出しになっているので、次は恋句をお願いします」「次は恋離れの句を作ってください」といった指示をするとうい。

実作して、公平に決めるので、実力が反映しやすく選ばれる者に偏りが出やすい。あまり票の入らない学生には、どこがよくないのか具体的に指導しなければならない。教員自身が参加しているので、教員の句が選ばれることもある。多くても三分の一が適当である。同数票の場合はもちろん、最多でも次点の句の内容によっては譲る態度が必要だろう。

年度によって実作が得意な学生が多い年と評釈の方が得意な年と違いがあった。連句は座の文芸というだけあって、連衆同士が打ち解けている場合がよい句になりやすい。本学の共通教育の場合、様々な学部から学生が集まるので、お互いのコミュニケーションがとれるように配慮すべきである。

おわりに

実作を含む連句の授業を続けて四年になった。ひとまず、私のような俳諧に詳しくない研究者でもひと通りの授業をする方法が発見できたと思うが、今後の課題をいくつか述べておわりにしたい。句の指導として「一句として立つ」＝「単独として意味が通るように作る」ことを重視していなかった。深沢眞二『連句の教室』が重視している項目である。今後の作句の指導に取り入れたい。また、今まで連衆（参加者）に俳号をつけずに行ってきた。俳号はこれからつけてやってみようと考えている。

また、今回の授業方法は参加人数が十名以内を想定している。筆者の方法では五、六人が一番やりやすいはずである。人数が多い場合の対応は今後の課題である。

最後に平成二十五年度の学生と作った連句を掲出して終わりとする。参加の学生のなかでは『十七季』を小旅行に持って行って、三人で俳諧三物（みつもの、初句から三句まで）を作った学生もいたそうで、関心をもってもらった点では成功だったといえよう。

平成二十五年度共通セミナーB

平成二十五年四月十九日（旧曆三月十日）より七月二十六日（旧曆六月十九日）まで

於 共通教育校舎二号館日本語日本文学資料室及び人文学部棟二一五研究室

発句 海風に負けず咲くや芝桜 吉丸

晩春。人文学部棟の裏庭の実景。学生を「芝桜」に喩えた。

脇 止まれよ止まれ空躍る蝶 熊谷

三春。挨拶への返事。「蝶」が学生。繰り返しに「かるみ」。韻字留め。

第三 水面ではお玉じゃくしも泳ぐらむ 濱野

晩春。前句の空に対比して水面。らむ留。

四 彼らは明日の合唱楽団 熊谷

無季。お玉じゃくしが蛙になる。四句目は軽く。

五 音合わせうさが踊る月の中 濱野（月の定座）

三秋。月のうさが複数。

六 供え団子は忘れさりけり 吉丸

仲秋。月見団子。初折の表の終わり。

七 夢うつつ余韻の残る夜長明け 熊谷（恋の呼び出し）

三秋。夜長。意味深。

八 まぶたとじれば君の忘れ香 石川（恋句）

無季。「残り香」を「忘れ香」と改めて収録。

九 こすつても落ちぬ想いに酔いしれむ 大原（恋句）

無季。匂いが落ちないのと想いが落ちないのを掛けた。

十 答え合わせをひとりするなり 村田（恋離れ）

無季。前句と合わせては恋心の確認。

十一 春風や願いをこめる門の前 村田

三春。受験関係。

十二 靴ひもしばり一步踏み出す 石川

無季。「結ぶ」ではなく「しばり」が決意のあらわれ。

十三 見送りの花の蕾は今咲かん 熊谷（花の定座）

初春。桜の開花。門出を桜が見送る。

十四 またこの場所と春光あびて 濱野（挙句）

三春。再会を約しての挙句。初折の裏は八句で終わり。